

花束

白いはなみずきの花を百輪

浩太に贈ろう

腕と脚に貼りつけて

村のどの塔よりも高く

舞いあがれるように

ゆったりとしたつむじ風をひとつ

浩太に吹いてやろう

小さな谷の村のうえをずっと回れるように

薄紫のリラの花束を十(とう) 浩太に届けよう

最初の花束は

彼女が眠る黒い急な屋根に撒(ま)き散らすように

二つめの花束は 彼女が働くバターの薰り高いパン屋に

三つめは初めて浩太が彼女の笑い声を聴いた狭い舗道に

それから一度だけふたりで行った曲がりくねった山道に

次は彼女が最後に浩太の静脈を指でなぞった 木苺の藪の傍に

そして彼女のことばが浩太の喉を刺し貫いた暗い淵の傍へ

七つめは彼女がしゃべるのを拒んだ楡(にれ)の茂みの下へ

もうひとつは彼女のスカートが歩き去るのを見送った風の原へ

九つめは彼女が背を丸めてしゃがんでいた 陽のふるあやめの

庭へ

浩太に告げよう

最後のリラは全力で投げるのだ

彼女が去った方角へと

放てリラを

渾身の力をこめて

彼女の足元へ

放て